

# Langacker の主観性 (Subjectivity) と 主体化 (Subjectification)

濱 田 英 人・對 馬 康 博

## 1. Langacker の認知文法の基本的な考え方

Langacker の提唱する認知文法の本質は人間が固有に有している基本的な認知能力の視点から言語を捉えているところにある。従って、彼の数多くの著作で扱われている言語現象はその背後にある人間の認知プロセスを説明するためのものであり、言い換えると概念化者の認知の営みをその現れとしての言語現象を通して明らかにすることに重点があるのである。つまり、人間がその取り巻く世界を一定の仕方できり分け、解釈するその認知能力の解明が Langacker の認知文法の本質であるわけである。そして、この人間の基本的な認知能力にどのようなものがあるのかについて、Langacker (1999) は以下のものを挙げており、また、人間がこのような認知能力をどのように身につけていくのかという基本的な問いに対して Langacker は日常の「知覚経験」をその原点と考えている。

### (1) 人間の基本的な認知能力

- a. 状況の中のどこかに視点をおき、相対的にその他を背景として認識する能力、また、焦点化されたものを背景から切り取って認識する能力  
(Figure/Ground 認知)
- b. 2 つのモノや事態を比較し両者の類似性や相違点を見つける能力  
(Metaphor の基礎)
- c. 何かを目印にしてあるモノを見つける能力 (参照点・ターゲット認知)

(Metonymy の基礎)

- d. 複数のモノを類似性や近接性等に基づいてカテゴリー化する能力
- e. モノや事態を抽象化、一般化して捉える能力

(Langacker(1999: 2-3)参照)

つまり、我々人間は日常の知覚経験を基本的な認知能力を用いていわば構造化し、その構造化された概念を用いて現象を理解しているわけである。ここでいう構造化とは知覚経験が抽象化されイメージ・スキーマ化されるということであり、それが語の意味や事態を理解する場合に重要な働きをするのである。たとえばこのことは我々がどのように語の意味を修得しているのかを考えてみると分かりやすい。そこで、我々がある動物を見て、それを「ネコ」と教わり、それを記憶にとどめるメカニズムを考えてみると、次の図1に示されるように、まず現実世界で我々の眼前にある動物を知覚し、それが「ネコ」という動物だと教わると、我々はその眼前にあるネコの細部を捨象したイメージとして記憶に保存するのである。

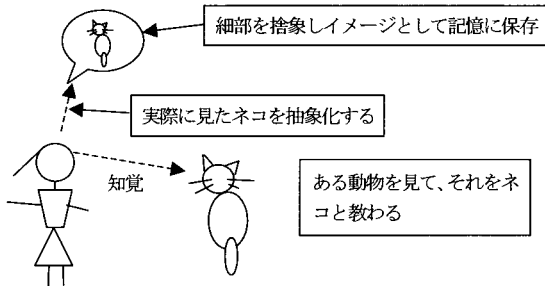
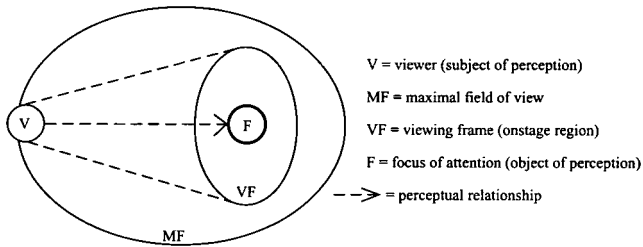


Figure 1

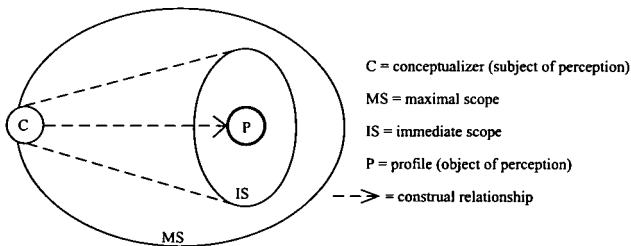
このように知覚世界の具体的なモノから細部を捨象したイメージ・スキーマを形成することができるのは、我々には「モノや事態を抽象化し、一般化して捉える」という認知能力があるからだということになるのだが、Langacker (2008)はこのように知覚対象であるモノや事態がイメージ化されたものを"simulation"と呼んでおり、我々は日常の様々な知覚経験を抽象化し脳内に

蓄えているからこそ、ネコや赤ん坊の泣き声、歩く、泳ぐというような行為をイメージすることができるのであると述べている。そして、このことからLangackerの言語観の根底にあるのはある対象物を観るという「知覚作用」を基盤とし、この「知覚作用」とあるモノを想起する(思い浮かべる)という「概念作用」の並行性であることが分かる。更に言えば次の図2、図3はこの「知覚作用」と「概念操作」の並行性を図示したものであるが、Langacker(1995)では"viewing"という用語を知覚作用における「観察者(V)」と「知覚の対象(F)」の観察関係(破線矢印)と概念操作における「概念化者(C)」と「プロフィール(P)」の解釈関係(破線矢印)の両方に用いていることもこのことを裏付けていると言える。



(Langacker 1995: 155)

Figure 2: Some constructs that apply to visual perception



(ibid.: 156)

Figure 3: Conceptual notions corresponding to the perceptual notions of Figure 2.

この「知覚作用」と「概念操作」の並行性に関して身近な例を挙げると、「遠くから見る、近づいて見る」という視覚上の遠近は同様に概念操作にも当ては

まるということである。つまり、対象物がある程度距離を置いて見ているときにはその輪郭が知覚されるが、次第に近づいていくことで、とうとうその対象物の輪郭が視界からはみ出し、輪郭が見えなくなるという知覚経験は誰にでもあるが、このような視界（観察フレーム）内で有界的(bounded)か非有界的(unbounded)かという認識の違いが名詞の可算・不可算の根底にあるのである。たとえば、次の(2a-b)で chicken が可算名詞になるか不可算名詞になるかは、図4(a-b)に示されるように視界（観察フレーム）の範囲の取り方の違いに起因するわけである。

- (2) a. I saw a lot of chickens in the farm. (可算名詞)  
 b. Chicken is my favorite food. (不可算名詞)

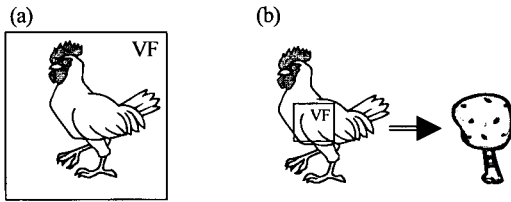
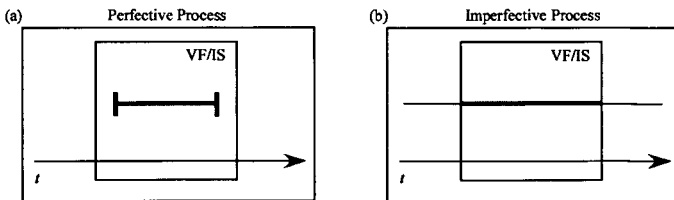


Figure 4

そして、この知覚上の「見え」と同じことが概念領域にもあり、この違いが完了プロセスと未完了プロセスを特徴付けているのである。



(ibid.: 177)

Figure 5: *Perfective and imperfective processes.*

- (3) a. John bought a new car. (完了プロセス)  
 b. John resembles his father. (未完了プロセス)

図 5 (a) は完了プロセスを表わしており、これは時間的な認識フレーム内で有界的 (bounded)、つまり全体が認識フレーム内にあるようなプロセスで、(3a) の buy から分かるように、完了プロセスの特徴は変化がありその一部を取り出してもそれと認識はできず、全体で初めてそれとして認識できるということである。それに対して、図 5 (b) の未完了プロセスは時間的な認識フレームの外に無限に広がっているので非有界的 (unbounded) であり、(3b) の resemble から分かるように、未完了プロセスの特徴は変化がなく内的に均質でどの一部を取り出してもそれとして認識できるということである。

更に言えば、これまで述べてきたように我々がモノや事態を解釈する場合の「概念操作」というものが本来的に「知覚経験 (知覚作用)」に根ざしているという考え方は Langacker の「意味は概念化にある (meaning resides in conceptualization)」という主張にすでに表されているとあってよい。というのは概念化とは事態を解釈する認知プロセス (cognitive processing) であり、この認知プロセスは我々の「心的経験 (mental experience)」に基づいたものであり、その心的経験は我々の知覚世界における日常の身体的経験 (bodily experience) から抽象化された image schema の複合体として特徴付けられるものであるからである。換言すれば、日常の知覚経験を抽象化した基本概念を用いて我々は世界を切り取り、あるいは事態を理解しているのである。Langacker (2008) はこの基本概念として "minimal concepts", "configurational concepts", "conceptual archetype" を挙げ、それぞれがどのような知覚経験に基づいたものであるかを (4) のように述べている。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> この image schema がどのようなものかを Langacker は次のように説明している。 Cognitive linguistics incline more to imagistic accounts. The best-known proposal posits a set of **image schemas**, described as schematized patterns of activity abstracted from everyday bodily experience, especially pertaining to vision, space, motion, and force. Image schemas are seen as basic, "preconceptual" structures that give rise to more elaborate and more abstract conceptions through combination and metaphorical projection.

(Langacker 2008: 32)

(4) While adopting an imagistic orientation, for my own purposes I prefer to distinguish several kinds of fundamental notions, each "basic" in its own way and useful for the characterization of more complex structure:

1. Basic in one sense are **minimal concepts** in particular domains of experience. I have in mind such notions as line, angle, and curvature, in the spatial domain; brightness and focal colors, in vision; precedence, in time; and the kinesthetic sensation of exerting muscular force.
2. Also minimal, but independent of any particular experiential domain, are highly schematic **configurational concepts**, e.g. contrast, boundary, change, continuity, contact, inclusion, separation, proximity, multiplicity, group, and point vs. extension. Being abstract and applicable to most any domain, these come closest to the apparent spirit of image schemas.
3. Some notions commonly cited as image schemas fall instead in my third class, **conceptual archetypes**. These are experientially grounded concepts so frequent and fundamental in our everyday life that the label archetype does not seem inappropriate. Here are some examples: a physical object, an object in a location, an object moving through space, the human body, the human face, a whole and its parts, a physical container and its contents, seeing something, holding something, handing something to someone, exerting force to effect a desired change, a face-to-face encounter. These notions are fairly schematic, but considerably less so than the configurational concepts. Some are incorporated as components of others. While they can be quite complex and hard to describe explicitly (try explaining what a physical object is!), they are basic in the sense that they are readily apprehended as coherent conceptual gestalts at an early developmental stage.

つまり、我々は知覚経験に根ざした "minimal concepts", "configurational concepts", そして "conceptual archetypes" という基本概念に照らして事態を認識し、それを理解しているのである。

この知覚と認識の並行性を基本とする Langacker の言語観は、言語というものが我々がある対象を認識し、それを一定の仕方で解釈し (construe)、どのように言語化するかという認知活動と切り離しては存在し得ないことから自然な言語観であるといえる。換言すれば、対象物や事態の存在は概念化者がその対象物や事態を知覚することで、その存在がいわば確立するのであり、それが何であるかという理解は知覚と同時に並行的に概念世界でなされるわけである。そして、このように知覚作用と概念操作が同時並行的であり、通常はそれを切り離して考えるということをしないうために、我々がある対象を知覚し、それを理解するという作業は同時並行的であるわけであるが、知覚対象とそれを知覚して理解する概念化者の関係も同様に通常は分離して考えることはない。というのは概念化者が自分で自分の存在を意識することが通常はないからである。とは言っても、概念化者は明確に存在しているわけであるから、ここに図 2 に示されているように「観られる側」としての対象や事態とそれを「観ている側」の概念化者の関係が存在するわけである。また、「知覚」と「認知」の並行性というのは記述対象そのものにも同様にあり、先に図 4 と図 5 で見た知覚世界での boundary の有無と概念世界での boundary の有無がまさにそうである。そこで、知覚世界と概念世界の両方で「観る側」としての知覚者や概念化者と「観られる側」の知覚対象と概念対象を区別し、知覚者が知覚対象をどのように知覚するのかということを概念化者の概念操作に対応させて、Langacker (2008) ではその知覚作用と概念操作の関係を以下のように述べている。

- (5) An expression's meaning is not just the conceptual content it evokes — equally important is how that content is construed. [...] It is hard to resist the visual metaphor, where content is likened to a scene and construal to a particular way of viewing it. Importantly, CG does **not** claim that all meanings are based on space and visual perception, but the visual metaphor does suggest a way to classify the many facets of construal, if only for expository purposes. In viewing a scene, what we actually see depends on how closely we examine it, what we choose to look at, which elements we pay most attention to, and where we view it from. The corresponding labels I will use, for broad classes of construal phenomena, are **specificity**, **focusing**, **prominence**, and **perspective**.

(Langacker 2008: 55)

つまり、我々人間は対象物を観る場合にどのくらい近づいて観るのか (specificity)、どこに視点を置くのか (focusing)、その中の何に注目するのか (prominence)、そしてそれをどこから観るのか (perspective) という知覚作用を通してその対象を観るわけであるが、概念世界で我々がモノや事態を認識する場合にもこれと同様な概念操作によってそれを認識しているということである。

このように perspective とは概念世界では概念化者と事態における関係 (viewing arrangement) ということであり、そして、概念化者が事態をどの位置から解釈するかという vantage point が事態の意味解釈に大きく影響するわけである。小稿で具体的なテーマである subjectivity/objectivity という概念は次の(6)の主張からも分かるようにこの vantage point に関係するものであることをここで確認しておきたい。<sup>2</sup>

<sup>2</sup> Langacker(2009)は"perspective", "vantage point"について以下のように述べている。

(i) If conceptualization (metaphorically) is the viewing of a scene, perspective is the **viewing arrangement**, the most obvious aspect of which is the vantage point assumed. (ibid.: 73)



- (6) Closely related to vantage point is a subtle but important aspect of construal known in CG as **subjectivity** and **objectivity**. [...] Subjective construal is characteristic of the viewer's role as such — as an offstage locus of perceptual experience that is not itself perceived. Conversely, objective construal characterizes the onstage focus of attention, which (as least in that capacity) does not engage in viewing. By virtue of being attended to, an entity construed objectively is clearly more prominent than it is when construed subjectively.

(ibid.: 77)

以下ではこれまで述べてきた Langacker の認知文法の基本的な考え方を踏まえて、彼のいう主観性(subjectivity)とはどういうことであり、主体化(subjectification)とはどのような認知操作であるのかを述べたい。

## 2. Langacker の「主観性(subjectivity)」と 「主体化(subjectification)」

Langacker の Subjectivity(主観性)とは(7)に定義付けられ、(8)に説明されるように「主体としての概念化者と客体としての事態との解釈関係」のことである。

- 
- (ii) A **viewing arrangement** is the overall relationship between the "viewers" and the situation being "viewed". For our purposes, the viewers are conceptualizers who apprehend the meaning of linguistic expressions: the speaker and the hearer. (ibid.)
- (iii) One component of the viewing arrangement is a presupposed **vantage point**. In the default arrangement, the vantage point is the actual location of the speaker and hearer. The same objective situation can be observed and described from any number of different vantage points, resulting in different construals which may have overt consequences. Many expressions undeniably invoke a vantage point as part of their meaning. (ibid.: 75)

- (7) The notions subjectivity and objectivity pertain to the **construal relation** between a conceptualizer and the conception he entertains, i.e. between the **subject** and **object of conception** (Langacker 1985; Vol. I, 3.3.2.4). With respect to this relation, an entity is said to be construed **subjectively** to the extent that its participation is confined to the subject role, and **objectively** when it is limited to the object role. A subjectively construed entity is therefore part of the conceptualizing process or apparatus itself but excluded from the content of the conceptualization.

(Langacker 1991: 215)

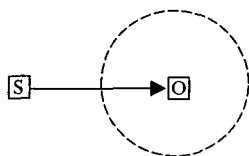
- (8) An entity is construed objectively to the extent that it is put onstage as a focused object of conception. By definition, an expression's profile is construed with a highly degree of objectivity, being the focus of attention within its immediate scope. At the opposite extreme, an offstage conceptualizer is subjectively construed to the extent that it functions as the subject of conception without itself being conceived. Maximal subjectivity attaches to a tacit locus of consciousness, an implicit conceptualizing presence that is not itself an object of conception. So defined, subjectivity/objectivity is a matter of vantage point and role in a viewing relationship.

(Langacker 1999: 297)

より具体的に言えば、ある事態を解釈してそれを言語化する場合、記述対象の事態は比喩的にオン・ステージ上にあるものとして捉えられ客体的に解釈されている(objectively construed)のに対してそれを解釈する概念化者はその解釈している自己自身を意識することはないので、それを比喩的にオフ・ステージにいるものと考え、主体的に解釈されている(subjectively construed)というわ

Langackerの主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification) (濱田英人・對馬康博)

けである。Langacker(1987)はこれを次の図6ように示し、これを最適視点構図(optimal viewing arrangement)と呼んでいる。



(Langacker 1985: 121)

Figure 6: Optimal viewing arrangement

ここで重要なことは、この図6の概念化者と事態との位置関係は先に見た specificity, focusing, prominence, perspective という事態の捉え方(construal)の一つであるということであり、従って、概念化者が(9a-b)のようにモノや事態をどの程度細かく捉えているのか、(10)のように何を Figure と認識し何を Ground として認識するか、また、(11a-b)のように事態の中の何を tr(つまり primary figure)と認識し何を lm(つまり secondary figure)と認識するか、更に(12a-b)のように事態のどちらからどちらへ心的走査(mental scanning)するのかという事態解釈の仕方は図6の最適視点構図でもなされているわけである。

- (9) a. rodent → rat → large brown rat → large brown rat with halitosis  
b. Something happened. → A person perceived a rodent. → A girl saw a porcupine.

(Langacker 2008: 56)

- (10) Walking along the street, I came across a strange group of musicians.  
Ground Figure

(Hayase 1997: 37)

- (11) a. The lamp is above the table.  
tr lm  
b. The other guests all left before we arrived.  
tr lm

- (12) a. The hill gently rises from the bank of the river.  
b. The hill gently falls to the bank of the river.

そして更に付け加えれば、モノや事態を概念化の客体として認識し、それを主体としての概念化者が一定の仕方では解釈し、言語化されたものが上の(9)から(12)の言語表現であるわけであるから、その言語表現にはオフ・ステージ上の概念化者の存在が不可欠であるということである。従って、あらゆる言語表現は一般的に言われる意味で話者の主観が反映されていると言えるわけであるが、(7)で述べられている Langacker の主観性という概念はこれとは異なることは注意が必要である。そこで、このことを確認した上で小稿の具体的なテーマである Langacker の主体化(subjectification)とはどのようなものかを述べたい。

## 2.1. 主体化(Subjectification)とは何か

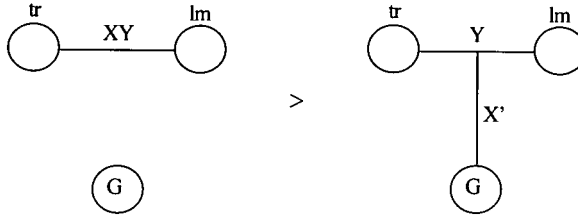
そこでまず重要なことは、主体化とは(13)に定義されるように、元々は客体的に解釈されていた実体(entity)が主体的に解釈されることによっておこる意味拡張であり、この現象には(14)のように述べられ、図7に示されるような概念化者の事態との関わり方の変化が関わっているということである。

- (13) **Subjectification** (discussed more fully in Langacker 1990b) is a semantic shift or extension in which an entity originally construed objectively comes to receive a more subjective construal.

(Langacker 1991: 215)

- (14) Subjectification can now be characterized as the realignment of some relationship from the objective axis to the subjective axis.

(Langacker 1990: 326)



(ibid.: 325)

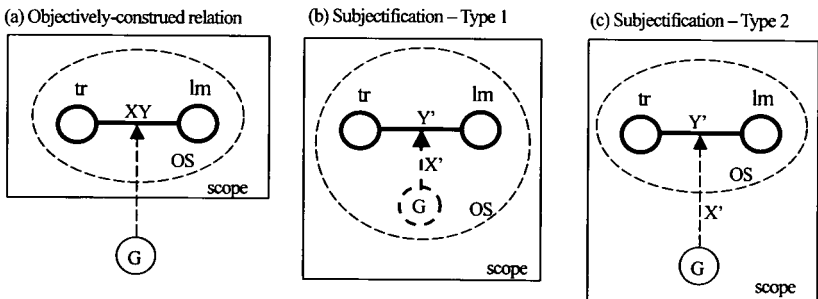
Figure 7

そして、この変化によって(15)に述べられているように概念化者の認知操作 (conceptual operations)が顕在化し、それが意味を担うようになることを主体化というわけである。

(15) Subjectification is the "laying bare" of conceptual operations which are immanent in the original lexical meanings and in that sense constitute their "deepest" properties.

(Langacker 1998: 88)

この点で Langacker(1991)が主体化の過程を図8ように示し、(16)のように述べていることは注目に値する。



(Langacker 1991: 216)

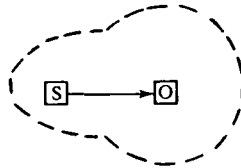
Figure 8 (Fig. 5.6)

(16) There is reason to believe that epistemic predications can indeed arise in this fashion, and that the full progression (a) > (b) > (c) of Fig. 5.6 represents a possible course of historical evolution.

Importantly, these developments do not entail any change in trajector/landmark assignment — the same objectively construed participants can retain these roles at all three stages.

(Langacker 1991: 216)

つまり、主体化という現象には図 8 (b)のように概念化者が自身を客体化し、onstage region に位置付けるという認知プロセスを伴うということであり、ここに図 9 に示される「自己中心的視点構図(egocentric viewing arrangement)」の必然性があるということになるからである。



(Langacker 1985: 121)

Figure 9: Egocentric viewing arrangement

## 2.2. 人間の基本的な認知能力と「主体化」現象

主体化とは概念化者の認知操作が顕在化し、その結果それが言語表現の意味の一部に組み込まれることで生じる言語表現の意味拡張という現象であることはすでに述べた。このことを 'across' を例に説明すると、(17a)のように物理的な移動の経路を表わすという最も基本的な意味から、そこに本来的に内在しているその物理的な移動の経路を認識する概念化者の破線矢印で示される認知操作が顕在化し、それが(17b)に表わされているように 'across' の意味の重要な一部となっていく現象である。

(17) across (preposition & adverb)

a. from one side to the other of (a place, area, etc.):

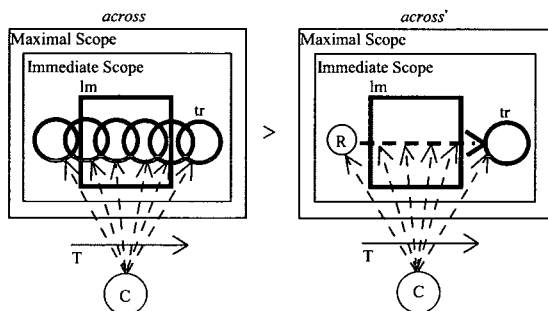
John ran across the street.

b. expressing position or orientation:

They lived across the street from one another.

(Oxford Dictionary of English)

この 'across' の意味拡張を Langacker(1999)は図10のように図示している。



(Langacker 1999: 303)

Figure 10

そこで、この Langacker の主張する「主体化」という現象を考える上で決定的に重要なことは、先にも述べたように、この「概念化者の認知操作の顕在化」には概念化者自身がその認知操作を認識するという過程を必然的に伴うということである。もっと言えば、「主体化」という現象は、まず認知主体としての概念化者が自らを客体化して、その認知操作を自らが認識に、最終的にはその認知操作の主体である概念化者が再び主体的に解釈され、事態の概念化の道具となるということである。

ではこの「主体化」というのはどのような認知的根拠を有するものなのだろうか。結論的にはこのことは言語が人間の認識作用の重要な一部であり、言語の意味を概念化(conceptualization)にあるとする認知文法の視点からすれば、

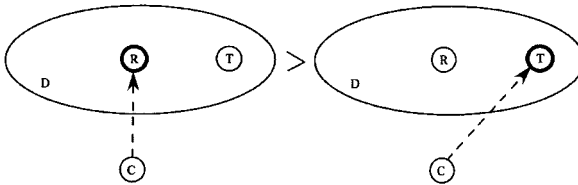
この「主体化」という現象も「世界」をどのように捉えるか、また、どのように切り取るかに深く関与する人間の基本的な認知能力と無関係ではありえない。そこで、この観点からこの「主体化」という認知操作の原点を考えると、(18)に定義付けられる「参照点能力(reference point ability)」を挙げることができる。

(18) the ability to invoke the conception of one entity for purposes of establishing mental contact with another (i.e. target).

(目標物と心的接触を確立するためにある実体の概念を想起する能力)

(Langacker 1993: 5)

つまり、人間には何かを目印に何かを見つけるという能力が備わっており、このことが「主体化」と深く関わっているのではないかということである。Langackerはこの参照点能力を図11のように図示し、また、この能力を反映した構造を「参照点構造(reference point constructions)」と呼んでいるが、その身近な例として次の(19a-b)のようなものを考えてみても、この能力が知覚作用や概念操作に非常に一般的なものであることが分かる。



(Langacker 1995: 188)

Figure 11: *Two-part representation of the reference-point function*

(19) a. 金星→北斗七星 [視覚的に金星をRとして北斗七星を見つける]

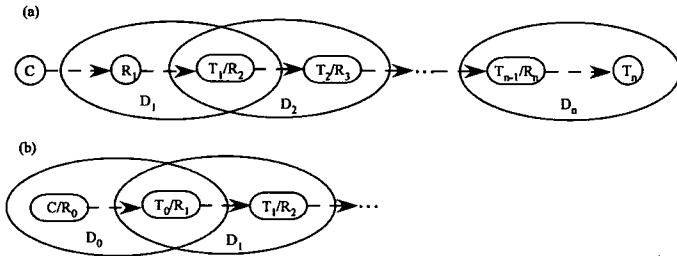
(知覚作用)

b. John's car [心的に John をRとして車を特定する] (概念操作)



そこで、この参照点能力から主体化という現象を捉えようとする場合、そのヒントとなるのは Langacker(1998)がこの参照点構造ではTが次の実体のRとして機能し、それが繰り返され連鎖をなしている場合があるとして、(20)のような例を挙げ、このときの認知操作を図12(a-b)のように図示していることであり、もっと言えば、この図12(a-b)の違いを(21)のように述べていることである。

(20) Bill's friend's cousin's wife's Lawyer's new car



(ibid.: 189)

Figure 12: Reference-point chains of indefinite length.

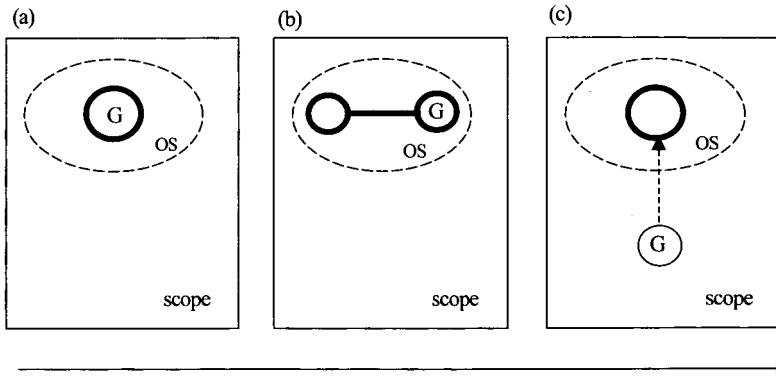
(21) C is thus depicted as being both the conceptualizer and the initial reference point,  $R_0$ , the chain's subjective anchor.

(ibid.)

つまり、この参照点連鎖では図12(b)のように「Cが概念化者であると同時に連鎖の主観的な支点(anchor)として最初の参照点であるという二重の役割を果たしている」ということであり、この概念化者が参照点として機能することが「主体化」を考える上で非常に重要な意味をもつのである。というのは、主体化とは先にも述べたように概念化者の認知操作が前景化することであるが、この前景化には概念化者自身がその認知操作を認識することが必要だからである。もっと言えば、「主体化」の過程では、まず認知主体としての概念化者の

認知操作が客体化されてそれを自らが認識に、最終的にはその認知操作の主体である概念化者が再び主体的に解釈され、事態の概念化の道具となるわけである。これを参照点構造に当てはめて考えると、John's car では一見、John's が参照点で、ジョンの所有している車がターゲットという構図であるが、その際には図11の概念化者(C)から参照点(R)への破線矢印で示されている概念化者のその実体への心的接触が不可欠である。つまり、John は概念化者がそれを想起することで初めてその存在があるわけであるから、概念化者が John の参照点として機能しているということになるのである。このようなわけで、図11は、まず、Cが参照点となり、Rがターゲットという構図でRが認知され、そのRを参照点としてTが認知されるということを表わしているともとれるわけである。そして、ここで重要なことは概念化者の自己知覚（自己認識）であり、この参照点としての自己の客体化、これが自己の他者化の原型であり、その客体化された自己の事態に対する認知プロセス（認知操作）が存在するという認識に繋がり、これが「主体化」という現象の第一歩であると言える。

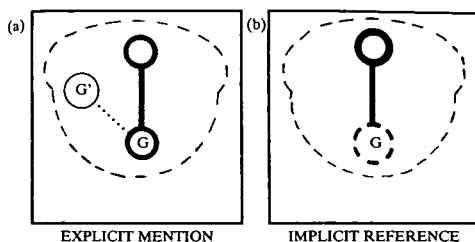
そして更に、このことに関して興味深いのは Langacker(1991)がグラウンドの主観性の度合いを次の図13のように示していることである。



(Langacker 1991: 94)

Figure 13: *increasing subjectivity of G*

ここで図13(a)は I, you が言語化される場合で、G が客体化されてオン・ステージ上にあり、objectively construed されていることを表わしたものであり、(b)は near me, from me のような場合で、G は事態と関わりを持ち、関係概念の一部となっていることを表わしており、この場合もやはり G は客体化されオン・ステージにあり、objectively construed されている。そして、最後の(c)は this のような deictic 表現の場合であり、この場合は G はオフ・ステージにあり、this で指示される実体を同定する参照点になっていることを表わしており、図13(a)から(c)にいくに従って、G の主観性が高まっていることを表わしている。ここで (b)と(c) の subjectivity の度合いの違いは、(b)ではある実体との関係を表現するために G を客体化し、それを参照点にして、その関係を捉えているが、単に自己を客体化しているのではなく、その客体化された自己とある実体の関係を解釈するといういわば二重の機能を果たしているということである。つまり、(b)ではその次の段階で、図14(a)のように G の認知プロセスを認識する displace された G' があるわけである。そして更に次の段階の図14(b)で、G と G' が融合し、そうした過程を経て、最終段階としての図13(c)では概念化者は自分を参照点として実体を解釈しているが、G はオフ・ステージであり、その認知操作も主体的であり、事態の概念化の道具として機能しているので、それだけ主体化が進んでいると言えるわけである。



(Langacker 1985: 143)

Figure 14

つまり、「主体化」という現象は「何かを目印にしてあるモノを見つける」という知覚作用が何かを理解するという概念世界に適用されて、参照点と心的接

触をとっている概念化者が自己を認識することによっておこる「自己の客体化」に根ざしており、この構図を通して自己の認知操作を顕在化し、さらにそれが固定化することで、その認知操作が言語表現の意味の一部となっている現象であるということが出来る。従って、このように考えると、主体化の過程をより詳細に図示すると以下のようなになる。

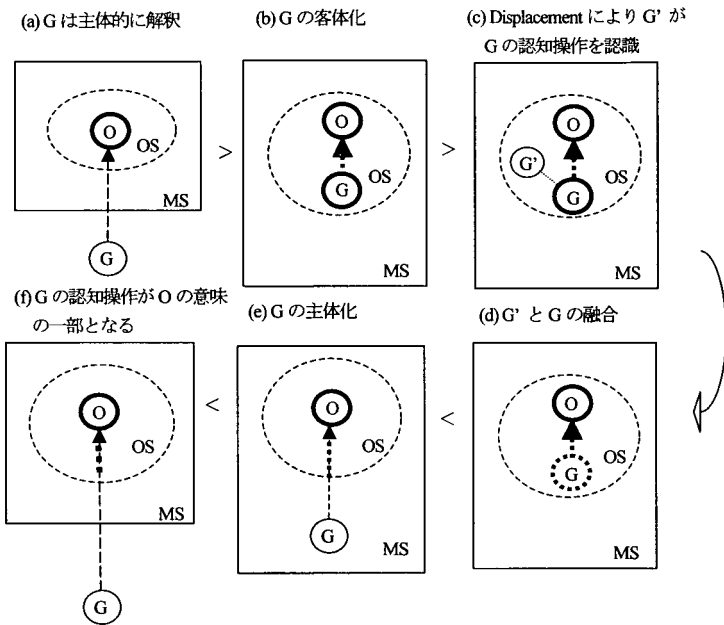


Figure 15

つまり、図15(a)では概念化者(G)は最大スコープ(舞台)の外から記述対象(O)を最大限に客体的に解釈しており、この段階では概念化者は最大限に主体的に解釈されている。つまり主体と客体が完全に分離している。それが(b)の段階では概念化者が自らを客体的に解釈しオン・ステージに位置付けられている。これは概念化者の認知操作の客体化であり、その次の(c)の段階で displace された概念化者(G')によって自己(G)の認知操作を認識することで、この認知操作が意味の重要な一部であることを認知するわけである。そしていったんこの

認知操作が自己認識されれば、それは常に事態解釈に関わって存在しているということがいわば慣習化されるので、概念化者が自らを観察の対象とする必要がなくなり、(d)のようにGとG'が融合し、その次の段階では(e)のように概念化者は自らの視点で記述対象(O)を解釈するという認知主体の働きに戻るわけである。そして、ここで重要なことは記述対象がオン・ステージ上にあり客体的に解釈されているのに対して、概念化者はオフ・ステージで主体的に解釈されているが、(c)の段階で自己認識した認知操作が記述対象の意味に含まれているということである(このことは概念化者の認知プロセスを表す破線矢印の一部が太線になっていることで表している)。つまり、概念化者の認知操作の顕在化である。そして、このような過程を経て、最終的に(f)に示されるように概念化者が最大スコープの外に位置付けられ、記述対象は最大限に客体的に解釈され、概念化者は最大限に主体的に解釈される最適視点構図である(a)の状態に戻るわけである。もっと言えば、主体化が概念化者の認知操作が顕在化し、意味の一部を担うようになる現象というのは、中村(2004, 2009)の主張するIモードからDモードへの捉え直しの際に概念化者が対象をメタ認知(客体視)することでその対象を客体として認識するのと同じように、概念化者自身の認知操作がメタ認知され、それが対象の意味として定着することであるということもできるのである。そして、このメタ認知された概念操作が対象の意味として確立したものが、先に見た(17b)の辞書的定義として'across'の意味に組み込まれるのであり、図10(a-b)は図15の(a)と(f)に対応するものなのである。

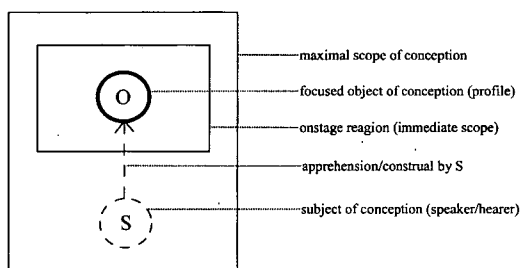
### 3. 2つの意味の Subjectification-Langackerの「主体化」と Traugottの「主観化」

"Subjectification"という概念はLangackerのものは「主体化」、Traugottのものは「主観化」と訳し分けられることがあるが、これらは時として混同されてしまうこともある。しかし良く考察してみると両者は互いに重なる部分もあるが、異なる概念であることが見えてくる。そこでこの節では両者を比較し、

どの部分が重なり、どの部分が重ならない異なる部分であるのかについて考察する。そこでまずLangackerの「主体化」(3.1節)とTraugottの「主観化」(3.2節)とを確認し、その後両者の違いを指摘していく(3.3節)こととする。

### 3.1 Langackerの主体化

Langackerが言う「主体化(subjectification)」とはこれまで述べてきたように、グラウンディング(grounding)に関与している概念化者(conceptualizer)の「立ち位置(vantage point)」と認知操作(conceptual operation)とが関わっておこる現象である。<sup>3</sup> 2節の図6で示した最適視点構図(optimal viewing arrangement)では、この「立ち位置」は話し手と聞き手の実際にいる場所、つまりオフ・ステージの領域である。しかし、概念化者が同じ状況を異なる「立ち位置」から観察し、叙述することも可能であり、結果として事態の捉え方も異なってくるわけである。このことは先に1節で見た視覚に基づく観察上の配置関係(viewing arrangement)と概念上の配置関係(conceptual arrangement)の並行性を考えてみても納得のいくところである。そして主体化とは2節の(15)でLangackerが主張するように概念化者の概念操作が顕在化することによって起こる現象であるわけであるが、ここでこの主体化という現象をより明らかにするために次の図16を用いて概念化者と事態との関係を整理しておく。



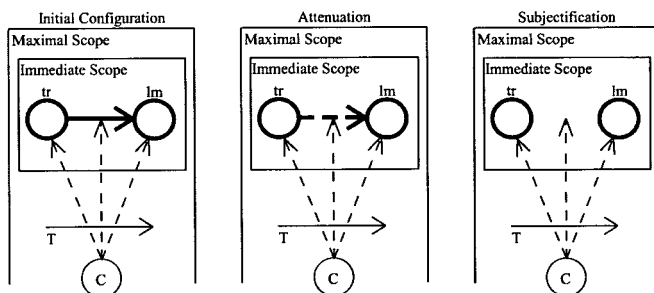
(Langacker 2006: 19)

Figure 16

<sup>3</sup> グラウンドとは発話事態、それにともなう話し手と聞き手、さらには話し手と聞き手のインタラクション、直接的な状況(特に発話時間と場所)などを包括する認知の拠点となるものである。

この図式の意図は、言語表現は一見対象となっている事態(O)のみを記述しているように見えるが、厳密にはそうではなく、その表現には主体的に捉えられる要素と客体的に捉えられるものが内在されていることを表しているということである。具体的に言えば、主体的な要素とはオフ・ステージ(offstage) (この図式の中では maximal scope に相当) から事態を解釈する認知主体(subject)としての話し手(speaker)と聞き手(hearer)である。これに対して客体的な要素とはオン・ステージ(onstage)上の主体によって捉えられ焦点が当てられる表現のプロファイル(profile)である。従ってある表現の主体化の度合いというのは言語表現自体が主体的もしくは客体的という性質のものではなく、それが認知主体によってどのように捉えられるのか、つまり主体的に捉えられるのか、それとも客体的に解釈されるのかという捉え方 (図中では破線矢印に相当) の問題であるわけである。

Langacker(1999)はこうした考えに基づき主体化を次のように図式化している。



(Langacker 1999: 298)

Figure 17

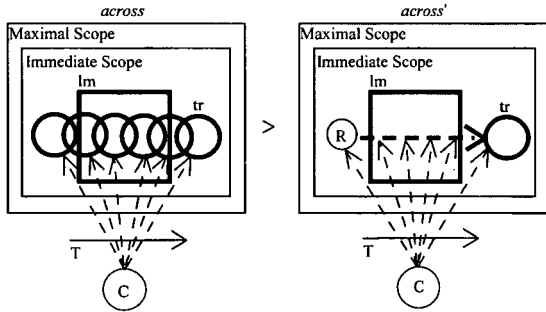
この図は客体的概念 (語の意味) の中に内在している主体的部分 (概念化者C) から伸びる破線部分、つまり概念化者の概念操作、特に認知プロセスとしての「心的走査(mental scanning)」が顕在化し、客体的部分 (太線矢印) が希薄化(attenuation)し、最終的には透明(transparency)になる (つまり、最も主体

的になる) プロセスを示したものである。<sup>4,5</sup> 換言すれば、最も主体的に解釈された状況では概念化者の認知操作・認知プロセスのみが残るわけである。

ここで具体的な事例として先に挙げた英語の 'across' の主体化を更に詳細に述べ、また通時的視点として英語の 'be going to' についての意味変化に関わる主体化を見ておく。まずは前者から考察していく。次の例と図を見よう。

- (22) a. Vanessa jumped across the table.
- b. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
- c. Vanessa is sitting across the table from me.
- d. Vanessa is sitting across the table.

(Langacker 1990: 326)



(Langacker 1999: 300)

Figure 18

<sup>4</sup> 主体化の中間段階は「希薄化」(attenuation)と呼ばれるが、Langacker (1999)によればこれには少なくとも4つのパラメーターが関わるということである。  
 I. change in *status*: from actual to potential, or form specific to generic.  
 II. change in *focus*, i.e., the extent to which particular elements stand out stand out as focus of attention, notably in terms of profiling.  
 III. a shift in *domain*, e.g. from a physical interaction to a social or experiential one [...].  
 IV. change in the *locus of activity* or *potency*.

(Langacker 1999: 301-302)

詳しくは Langacker (ibid.)を参照のこと。  
<sup>5</sup> 認知プロセスとしての概念操作には主に「心的走査(mental scanning)」が挙げられるが、概念化者がターゲットとしてのトラジェクターやそれを同定するために機能している参照点と接触するための「心的接触(mental contact)」、そして現実を未来へ投影させる「心的敷延(mental extrapolation)」といった操作等が考えられる。



(22a)は左図に対応するが、トラジェクター(tr)である Vanessa が連続的にランドマーク(lm)であるテーブル(the table)を移動していくことを概念化者が客体的に把握していることを表している。一方、(22b)は右図に相当し、この場合 Vanessa は物理的に移動しているのではなく、Veronica を参照点(R)としてそれによって同定されるターゲットであり、従って、これがトラジェクター(tr)として認識されているわけである。もっと言えば、この(22b)では物理的な移動が希薄化し、概念化者の認知プロセスである心的走査が顕在化しており、概念化者は参照点である Veronica を起点にランドマークで経路であるテーブル上を心的走査し、着点にいるターゲットとしての Vanessa を同定するといった「参照点構造(reference-point construction)」に基づく「心的接触(mental contact)」が顕在化しているのである。従って、このことから(22a)よりも(22b)の方が主体化の度合いが高いと言える。ただし、ここで注目すべきことは心的走査や心的接触という認知操作は後者の意味だけに存在するのではなく、前者の中にも当然存在しているものであり、前者の客体的物理移動が希薄化することによって、後者においてこれらの認知プロセスが顕在化しただけであるということである。<sup>6</sup> 従って、主体的意味を表すようになっても、トラジェクター(tr)自体は変わっていないわけである。次の(22c)では概念化者が自らを客体化し、参照点とすることで事態を認識している。ここでは概念化者は参照点ということと、その客体化された自己との関係で事態を認知操作によって解釈するという二重の機能を担っているということになる。従ってその分(22c)は(22b)よりも主観性が強いということになるのである。そして、(22d)になると参照点が概念化者自身であり、概念化者は自己をより主体的に解釈しており、従って、この(22d)は(22c)よりも更に主体化が進んだ段階として捉えられるわけである。

次に通時的観点からの主体化として英語の 'be going to' の意味変化を見ておく。次の例と図を見よう。

<sup>6</sup> 特に参照点構造に関する心的接触という認知プロセスは、前者には存在していないように思われるが、概念化者がトラジェクター(tr)が起点から着点まで物理的移動することを心的走査している状況を考えて、トラジェクターが占める起点を参照点と見なせばこれには心的接触が関与していることが見えてくる訳である。

- (23) a. Sam was going to mail the letter.  
 b. Sam was going to mail the letter but couldn't find a mailbox.  
 c. Sam was going to mail the letter but never got around to it.  
 d. If Sam isn't careful he's going to fall off that ladder.  
 e. Something bad is going to happen – I just know it.  
 f. It's going to be summer before we know it.

(ibid.: 302-303)

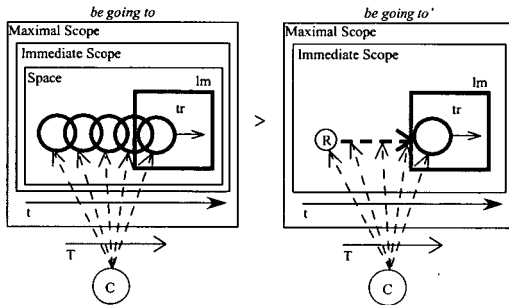


Figure 19

(ibid.)

まず、(23a)は意味が曖昧であり二つの意味が考えられる。一つはトラジェクター(tr)である Sam が物理的に時間軸(t)に沿って空間を移動していく様子を概念化者(C)が客体的に捉えたものであり、この意味は左図に相当する。一方、もう一つの意味は物理的空間移動の意味が希薄化し不定詞補部で表される事態の未来性を表す意味であり、この意味では概念化者(C)は参照点となる一定の時を起点に不定詞補部の事態をその先、つまり未来に位置づけ、時間軸(t)に沿って心的走査(mental scanning)していくという認知プロセスが顕在化し、それが意味の中核を担っている場合である。また、参照点構造が関わることにより、心的接触(mental contact)も顕在化している。従って、後者の意味は前者よりも主体的であると言える。そしてここで注目すべきことが二つある。一つは 'across'の事例と同様にトラジェクター(tr)である Sam はどちらの意味においても変わっていないことである。もう一つは後者の意味では概念化者の心

的走査と心的接触が顕在化しているが、これは前者の意味の中にも既に内在しているということであり、物理的移動の客体的意味が希薄化することによって概念化者の主体的な認知プロセスが残存し、換言すれば顕在化して意味を担っているということである。次に(23b)の事例は物理的移動の意味だが、この場合にはトラジェクター(tr)が実際に移動しているだけでなく、不定詞補部の事態を生じさせようという意図(intention)も感じられる。一方(23c)では移動の意味はなくトラジェクター(tr)の意図性という心的側面のみが残っている事例である。それが(23d)になると未来に起ると考えられる事態が偶然に生じるということを表すようになり、不定詞補部の事態の遂行は主語であるトラジェクター(tr)に帰されるものの、その事態に対する意図性はもはや感じられなくなる。更に、(23e)になると、トラジェクター(tr)である主語は参照点(R)となる起点の時には存在しておらず、故に事態遂行の責任性(responsibility)さえ希薄化して感じられなくなっている。むしろ、現在の状況の何らかの側面から概念化者は未来の事態の予測を立てるという構図となっている。最後に(23f)の段階になると、トラジェクター(tr)である主語の事態関与が完全に希薄化し、主体である概念化者が参照点(R)となる時間から時間の流れ(t)に従って心的走査を行うことによって時間的に状況を位置づけているだけとなる。(23e, f)の段階ではトラジェクター(tr)としての主語の事態関与が希薄化して消滅しており、結果として主体としての概念化者の認知プロセスだけが残っており、この状況は透明(transparency)と呼ばれる最も主体化が進んだ状況であると言える。このように、'be going to'は主体化を通じて通時的に意味変化を起こしてきたと考えられるわけである。

以上のように、Langacker の主体化とは客体的関係が希薄化し、概念化者の認知プロセスが顕在化するプロセスによって起こる意味拡張であり、従って共時的にも通時的にも意味変化を捉えられるモデルであると言える。<sup>7</sup>

---

<sup>7</sup> Langacker の主体化は通時的な意味変化全般を捉えられると解釈されることがあるが、Langacker(1998, 1999, 2006等)自身が述べているように意味変化の後期(later stage)を捉えるものとして解釈する方が良いと思われる。詳しくは3.3節を参照のこと。

### 3.2. Traugott の主観化

では次に(24)の主張を基に Traugott の主観化という概念がどのようなものであるのかを概観してみる。

(24) 'subjectification' refers to a pragmatic-semantic process whereby 'meanings become increasingly based in the speaker's subjective belief-state/attitude toward the proposition', [...]. This characterization of subjectification is very broad.

(Traugott 1995: 31)

この(24)から分かることは、Traugott の主観化という概念は広義の意味で使われており、言語の意味が話者の主観的な信念や態度を次第に表すようになる語用論的・意味論的過程のことを言うということである。また、ここでいう広義の意味とは、主観化という概念が話者の語用論的推論 (pragmatic inference) を主とした認知プロセスであるということと言うまでもないが、それだけではなく発話全体や文脈、また「間主観性 (intersubjectivity)」という社会対人関係でのプロセスによっても影響を受ける概念であるという意味である。<sup>8</sup>

このような定義に基づき Traugott は「文法化 (grammaticalization)」という現象に「主観化」が中心的な役割を果たすと論じたうえで、文法化とは語彙の意味を表す内容語が文法機能を表す機能語として新たな地位を獲得していく動的で、「一方向的 (unidirectional)」な通時的意味変化のプロセスであると論じている。また、Traugott のいう「文法化の一方向性」とは次の(25)の通りであり、意味変化の経路を表す「意味的・語用論的傾向 (semantic-pragmatic tendency)」とは(26)のように定義されている。

<sup>8</sup> 「間主観性 (intersubjectivity)」とは発話事態において主体としての話者 (書き手) が他者としての聞き手 (読み手) の注意 (attention) ・態度を取り込むプロセスのことを言う。例えば、敬語 (honorification) などがこれにより説明される。(cf. Traugott and Dasher 2002)

- (25) [...] semantic-pragmatic change in the early stages of grammaticalization is unidirectional: meanings with largely propositional (ideational) content can be gain either textual (cohesion-making) and expressive (presuppositional, and other pragmatic) meanings, or both, in the order: propositional > ((textual) > (expressive))

(Traugott 1989: 31)

- (26) *Semantic-pragmatic Tendency I:*

Meaning based in the external described situation > meanings based in the internal (evaluative/perceptual/cognitive) situation

*Semantic-pragmatic Tendency II:*

Meanings based in the described external or internal situation > meanings based in the textual situation

*Semantic-pragmatic Tendency III:*

Meanings tend to become increasingly situated in the speaker's subjective belief-state/attitude toward the situation

(Traugott and Kónig 1991: 208-209)

この「意味的・語用論的傾向」について更に付け加えると、Traugott and Kónig (1991)はこの3つの傾向のいずれにも推論(inference)というプロセスが関与していると述べており、そのプロセスにはメタファー(metaphor)とメトニミー(metonymy)の2種類があると主張している。そして、意味的・語用論的傾向のIとIIを反映した意味変化は類似性に基づくメタファーによる変化であり、IIIを反映したものは近接性に基づくメトニミーによる意味変化であると述べている (cf. Traugott and Kónig 1991)。

そこでそれぞれの傾向について具体的に見ると、まず意味的・語用論的傾向Iはメタファーに基づく意味変化のプロセスであるが、これは外的状況に関わる意味が内的状況 (評価・知覚・認識) に基づく意味に変化することである。この具体例としては「意味の向上(amelioration)」や「悪化(pejoration)」を挙

げることができ、例えば 'boor' は元々「農民(farmer)」という意味であったが、「不作法者(crude person)」へと意味変化したものである。またこの傾向Ⅰに関して更に例を挙げれば、'after'は元々空間前置詞であったが、時間前置詞へと意味変化を遂げたものである。次に意味的・語用論的傾向Ⅱに関してであるが、これもメタファーに基づく意味変化のプロセスであり、外的状況や内的状況に関わる意味からテキストを結びつける意味へと変化することである。例えば 'after' は空間から時を表すようになったわけであるが、それがテキスト間を結ぶ接続詞へと変化したのはこの例であると言える。最後に意味的・語用論的傾向Ⅲに関してであるが、これは傾向ⅠとⅡを基礎としてメトニミーによって起こった意味変化であり、それによって話者の状況に対する主観的な信念や態度を表すようになることである。この具体例としては 'while' はそれ以前に時間関係を表す接続詞として意味変化を遂げていたが、これがさらに「譲歩」を表す接続詞として意味変化を遂げたことが挙げられる。

ここで重要なことは、これらの傾向から意味がⅠからⅡを経てⅢに行くにつれて「主観的」となっていくわけであるが、特にⅢの傾向が Traugott の言う「主観化(subjectification)」に相当するということである。従って、このⅢの傾向には相手の態度を取り込む「問主観性」も関わることもあり得るわけである。このように Traugott の主観化とは通時的意味変化に関わる文法化の一部として説明される概念であるということである。

### 3.3. Langfacker の主体化と Traugott の主観性の違い

以上、考察してきたことから明らかなように、Traugott のいう主観化とは話者の語用論的推論(pragmatic inference)を主とした認知プロセスによって話者の主観的な信念や態度を次第に表すように意味拡張する語用論的・意味論的過程のことであり、そのためもっぱら通時的視点から文法化を捉えるということになる。それに対して Langfacker の主体化とは概念化者の認知操作の顕在化であり、この点で共時的視点としての意味の違いと通時的視点としての文法化に関わる意味変化をその射程に入れることが可能であり、この点で Traugott

Langacker の主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification) (濱田英人・對馬康博)

の主観化とは異なっている。しかし、このような射程の違いはあるが、通時的観点から見ると、一見すると両者はどちらも重なっているように思われるが、違いはないのだろうか。この節ではこの点を明らかにしておきたい。

そこでまず初めに、Traugott が Langacker の主体化という概念を誤解している点もあることから、まずこの点を整理しておく、1つ目として言えることは次の(27)のように Traugott は Langacker の主体化を「話者の見方(the perspective of the speaker)」と述べているが、先に見たように Langacker は話者と限定しているわけではなく、概念化者としては話者のみならず聞き手が含まれているということである。

(27) Langacker's work focuses primarily on 'subjectivity' as a gradient phenomenon found synchronically [...]. It concerns degrees of grounding in the perspective of the speaker from a cognitive point of view.

(Traugott 1995: 32)

また、Traugott と Dasher は(28)のように述べ、Langacker の主体化は特に事態構造等に注目しているとしているが、Langacker は 'be going to' や 'must' などの語彙の文法化にも焦点を当てており、事態構造だけを扱っているのではないことは明らかである。

(28) Langacker's is an approach from Cognitive Linguistics, with attention to situation types, especially event structures and associated syntactic subject (and object). Most of the examples are constructed out of context.

(Traugott and Dasher 2002: 98)

更にこの(28)から、彼らは Langacker の挙げる事例のほとんどが脱文脈化し

たものであるとして彼らとの違いを述べており、彼らの主観化に関する考え方を以下のように主張している。

- (29) Most frequently an expression is neither subjective nor objective in itself; rather the whole utterance and its context determine the degree of subjectivity.

(ibid.)

つまり、Traugott と Dasher のいう主観化とは表現自体が主観的か客観的かという問題ではなく、むしろ発話全体や文脈が主観性の度合いを決める要因であるということであり、この例示として、彼等は Langacker の事例(30)と文脈を与えた(31)を比較してその違いを述べている。

- (30) Vanessa is sitting across the table.

((22d)を再掲)(Langacker 1990: 326)

- (31) Max is sitting next to Bill, and Bill is sitting next to Martha.  
Vanessa is sitting *across* the table.

(Traugott and Dasher 2002: 98)

Langacker は先に見たように(30)の例を参照点が概念化者自身であり最も主体的な事例として挙げているが、Traugott らはこの例はむしろ中立的な(neutral)例であるとし、(31)のような文脈を与えられれば参照点が概念化者以外となる可能性があることを指摘している。というのは、誰かが夕食での席の配置に関して述べている電話での会話という文脈では参照点は必ずしも話者ではなく、Martha である可能性もあるからであり、また、ト書きの文脈では参照点が話者ではなく聴衆となるということになるからである。このように Traugott の主観化は(29)の引用のように、文脈の中で主観化を考えていくということであ



Langacker の主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification) (濱田英人・對馬康博)

り、この点で常に認知主体としての概念化者との関係で規定していく Langacker の主体化とは異なる側面を持っていると言える。

では、Langacker は自らの主体化という概念と Traugott の主観化の違いをどのように考えているのだろうか。このことについて Langacker(2006)は次のように述べている。

(32) Traugott's definition of subjectivity and subjectification pertains to the **domain** in which a situation resides (a matter of conceptual **content**). It therefore makes sense to talk about an expression's meaning becoming more subjective. For me, on the other hand, the terms pertain to **vantage point** (a matter of **construal**). In my usage it makes no sense to talk about the extent to which an expression or its meaning is subjective - we can only talk about the status of a particular element within the overall situation. A given meaning always comprises both subjectively and objectively construed elements.

(Langacker 2006: 17-18)

この(32)から分かることは、Langacker の見解は Traugott の主観化とは記述対象が位置付けられる「認知領域(cognitive domain)」に関わるものであり、そのために表現の意味自体が主観的かどうかということが問題となるのだということである。つまり、Traugott の主観化は心的態度またテキスト関係が関わって起こる概念内容の意味変化に関わるものであるということである。一方 Langacker の主体化とは概念化者の「捉え方(construal)」、特に「立ち位置(vantage point)」に関するものであり、その概念化者の捉え方によって客体的側面が希薄化し心的操作や心的接触といった認知操作が顕在化するプロセスであるから、認知の拠点(つまり、グラウンド)にいる概念化者としての認知主体と主体化の関係は切り離せない関係にあるわけである。

更に、文法化における Langacker の主体化と Traugott の主観化に関しては、

Langacker 自身は次のように述べている。

- (33) My position is compatible with Traugott's because her comment pertains to "the early stage of grammaticalization", whereas I have been more interested in the later stages, where objective elements are progressively stripped away, to the point where little if anything is left behind onstage.

(Langacker 1998: 87)

つまり、Langacker の立場は Traugott と矛盾しているわけではなく Traugott の主観性が「文法化の初期段階」と関係があるのだということである。そしてここでいう初期段階とは次の(34)の引用の通りである。

- (34) [...] semantic change in the early stages of grammaticalization does not necessarily involve bleaching: on the contrary, it usually involves specification achieved through inferencing. [...] the inferencing is of two kinds, metaphor and metonymy [...].

(Traugott 1988: 413-414)

つまり、文法化の初期段階での意味変化には希薄化(bleaching)が必ずしも含まれておらず、むしろ通常2つの推論、つまりメタファーとメトニミーによって特定化されるものを含んでいるというわけである。これは先にみた Traugott の主観化の主張とも一致する。これに対して、Langacker の主体化は(33)の引用にあるように、客体的要素があるにしてもほとんど残っていない程度にまで次第に希薄化が進み、最終的には透明になるという「後期の段階」を扱っているのである。

以上のように Langacker と Traugott が互いに指摘するように、両者は通時的意味変化を扱っているという重複部分はあるものの、基本的には別概念であ

Langacker の主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification) (濱田英人・對馬康博)

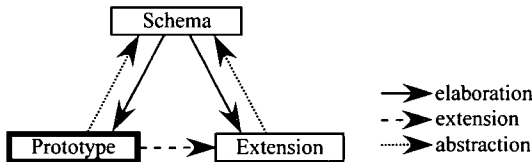
り、互いに射程としている領域が異なっているわけであるから、従って互いに矛盾するものではないと結論づけることができる。

## 4. カテゴリー化と Langacker の主体化

3節では Langacker の主体化は客体的部分が希薄化し概念化者の認知操作(特にスキミング能力と参照点能力)が前景化することであると述べたが、この節ではさらに議論を進め、主体化現象がカテゴリー化に関与していることを考察していく。

### 4.1 カテゴリー化の基本概念

まずは簡単に Langacker の言うカテゴリー化について外観する。次の図を見よう。



(Langacker 1990: 271, partially adapted)

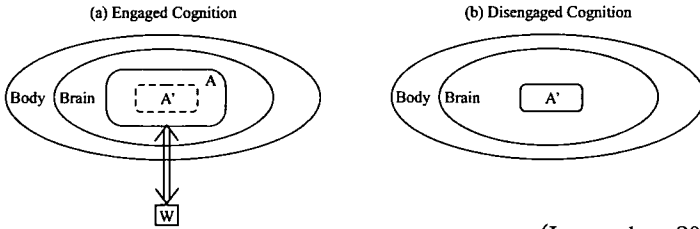
Figure 20

ここでプロトタイプ(prototype)とは当該カテゴリーの中で最も典型的な事例とされるものであり、スキーマ(schema)とはひとつひとつの個別事例からボトム・アップ式にそのカテゴリーの成員すべてに当てはまる共通性質を取り上げたものである。また、拡張(extension)とはプロトタイプからは何らかの逸脱する部分があるものの、プロトタイプとの類似性や近接性に基づき拡張した事例をいう。従って定着していない新規の事例が拡張されると、当然スキーマはその新規の表現の性質も取り込むことになるので、その意味で柔軟性を有するものである。ここで具体例として [ペット] というカテゴリーを考えてみよ

う。ペットと言われて直観的にすぐに思いつくものがプロトタイプであり、例えば〔犬〕などは誰でも直ぐに思いつくであろう。〔犬〕というものの性質として〔可愛らしい〕、〔懐く〕、〔手軽に飼うことができる〕などが挙げられるが、こうした犬全般に共通するような性質が抽象化されて〔ペット〕としてのスキーマが取り出されていく。他方ペットとして〔ヘビ〕を飼う人もいるが、本来的には爬虫類はその獰猛性などから必ずしも〔手軽に飼うことができる〕というわけではなく、プロトタイプの〔犬〕の持つ性質とは乖離する部分もあるが、そこに〔可愛らしさ〕などが感じられれば飼育する人も増えていき、ペットとしての地位を獲得していくこととなる。これが拡張の例である。このようにカテゴリー化は静的なものではなく、絶えず拡張の可能性を秘めた動的で柔軟なものであるわけである。そして何より重要なことはカテゴリー化というのは人間の認知やその現れとしての言語使用を抜きに存在するものではなく、むしろそれが多に関与しているのであり、特に Langacker のいうカテゴリー化に関して最も重要なことはカテゴリー化というのは「抽象化(abstraction)」という人間の基本的な認知能力(cognitive abilities)のひとつが背後にあり、それによって動機づけられているということである。

#### 4.2 概念的鑄型と主体化現象

前節のカテゴリー化の議論に基づき、Langacker(2008: 539)は主体化現象がカテゴリー化に関与していることを指摘しており、特にプロトタイプとスキーマの関係は主体化現象に他ならないと主張している。具体的に言えば Langacker(2008: 538-539)によるとプロトタイプの意味は客体的に把握される「概念的鑄型(conceptual archetype)」であり、スキーマの意味はその鑄型が他の経験の領域へと拡張されることで特定の認知領域とは独立した存在となったものである。ではここでいう概念的鑄型とはどのようなものであろうか。それを確認するために次の図をみよう。



(Langacker 2008: 535)

Figure 21

認知というものは我々が感覚や身体運動を通じて世界とインタラクションすることによって確立されるものであり、それは脳内の処理活動の中に蓄積されるものである。左図は「外界直接型認知(engaged cognition)」を表したものであり、ここでは人が物理的レベルにおいて直接的に外界(W)と二重矢印線で表されているインタラクションをはかる構図となっている。このインタラクションは人間の身体、すなわち感覚・運動器官を通じて行われるものである。Aとラベル付けされた四角形は事態関与における脳の処理活動を示している。またAの一部のA'と表示された破線の四角形部分は外界(W)との直接的なインタラクションから抽出され、その結果それ自体が自律的に生じていくようになる脳内の処理活動を表している。まさにインタラクションがなくなり、脳の処理活動が自律的に生じる認知が「外界間接型認知(disengaged cognition)」であり、これは右図で表されている。ここでいう自律的な脳内の処理活動とは個別経験をボトム・アップ式に積み重ねていく際に感覚・運動器官によって得られ脳内に蓄積された(すなわち、身体化された)イメージの集合体(imagery)のことである。<sup>9</sup> 従ってこのイメージの集合体によって、我々は具体的かつ実際の知覚や運動といった認知を伴わなくとも、容易に脳内である実体や出来事などのイメージを想起、つまり「シミュレーション(simulation)」することが可能な

<sup>9</sup> ここでいう自律的とは変形生成文法でいう言語能力の自律性とは全く異なり無関係である。認知文法では内容要件(content requirements)に従い、理論的な厳格さ(theoretical austerity)を取り入れており、変形生成文法のように言語能力といった「理論的仮構物」など存在せず認めないという厳しい立場を取っている。詳しくはLangacker(1987, 1991, 2008等)を参照のこと。

わけである。例えば我々は猫を実際に知覚していなくとも、これまで経験してきた猫から作り上げたイメージによって（どのくらい詳細かという問題は別として）猫を想起することができるのである。こうしたシミュレーション、つまりイメージの集合体が、我々の概念形成を司るための基本的経験を抽象化した集合体、つまり「概念的鑄型(conceptual archetypes)」なわけである。Lanagcker(2006: 28)は概念的鑄型の具体例として「欲する(WANT)」、「できる(BE ABLE)」、「意図する(INTEND)」、「行く(GO)」、「走る(RUN)」、「上がる(RISE)」、「持つ(HOLD)」、「得る(GET)」、「所有する(OWN)」、「支配する(CONTROAL)」、「使う(USE)」を挙げている。

以上のようなシミュレーション、すなわち概念的鑄型は具体的個別経験を抽象化したものであるため、元々はそこに関わっている個別経験ごとの具体的な認知プロセスが希薄化していると考えられる。このプロセスを確認するために次の例を考えてみよう。

(35) There's a house every now and then through the valley.

(谷間を抜けていくと時折家がぼつんぼつんと1軒ずつある。)

(訳は著者)(ibid.: 531)

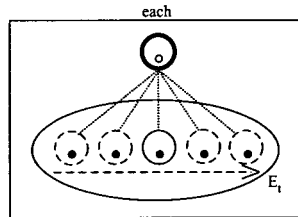
この表現では *There's a house* という表現は存在を表し、*through the valley* は移動の経路を表しており、また *now and then* は断続性を表している。ここで重要なことは、この文では「移動」を表す動詞表現は含まれていないが、我々が旅をするというシナリオを想定することで、この表現の旅行者が *through the valley* という旅の経路に沿って光景を眺めていることが容易に理解できるわけである。具体的に言えば、この表現の旅行者は谷間全体を眺めているのではなく、移動の過程で谷間からぼつんぼつんと断続的に家が見えている光景を眺めているのであり、この連続的なスキャンニングによって旅行者の視野には移動に伴って次から次へと光景が飛び込んでくることになるのである。我々人間はこのような具体的個別経験を抽象化して、「連続的に物事を見ていく」という

一般化された概念的鑄型を構築していくのである。<sup>10</sup> 従って、この(35)の表現が理解できるのは、我々が日常の具体的個別経験で事態を客体的に視覚を通して連続的にスキミングするという認知プロセスが抽象化・一般化され、主体的に把握されることで視覚が伴わない連続スキミングという認知プロセスだけが旅のシナリオという概念的鑄型として定着し、顕在化していくからなのである。従って、まさにこのプロセスは主体化に他ならないわけであり、こうした主体化によって生じた概念的鑄型は次の each のような例にも同様にあてはまる。

(36) a. As they filed across the stage, she called out the name of each graduate.

b. Each restaurant has its own recipe for tiramisu.

(Langacker 2008: 532)



(ibid.: 294)

Figure 22

each にはこの図22で描かれているように、一つずつ破線矢印に沿って連続的にメンバーをスキミングしていくという認知操作が関与している。しかしここで注目すべきことは(36)の事例は(35)のように客体的にある実体を視覚的に連続スキミングしてそれを旅のシナリオという概念的鑄型によって理解するというのではなく、*graduate* や *restaurant* を主体化によって抽出された連続ス

<sup>10</sup> Langacker (2008: 532) はこれを「スキミングシナリオ (scanning scenario)」と呼んでいる。

スキニングという認知プロセスが顕在化した概念的鑄型によってその一つ一つを脳内で処理していると考えの方が自然である。つまり、1節でみた視覚作用と概念作用の平行性を考えれば分かることだが、ここでは視覚的なスキニングではなく、概念化の段階で鑄型として抽出された概念的なスキニングという認知操作が働いているわけである。

以上のように、我々は外界直接型認知によって客体的に実体を捉えるわけであるが、主体化によりその客体部分が希薄化してそこに関与する認知プロセスが顕在化し、このような抽象化・一般化された認知プロセスがシミュレーション、つまり概念的鑄型として定着していくことで外界間接型認知が可能となり、その概念的鑄型を他の実体の概念化に適応することでそれを脳内処理をしていくわけである。そしてこの具体的な個別経験を一般化・抽象化し概念的鑄型を抽出するというプロセスはまさに主体化現象に他ならないわけである。そしてこのように考えてみると、主体化を動機付ける認知能力には2節と3節でみたものも含め少なくとも次の3つを挙げることができる。

### (37) 主体化を動機付ける基本的認知能力<sup>11</sup>

1. 抽象化能力
2. スキニング能力
3. 参照点構造能力

ここで1の抽象化能力というのはこの節で見た通り、抽象化という認知操作として現れるのであり、また2のスキニング能力は心的走査(mental scanning)という認知プロセスとして現れるもので、更に3の参照点構造能力は概念化者が参照点を目印に目標物であるターゲットに心的接触(mental contact)するという認知操作として現れるものであり、いずれも人間が基本的に有している能力である。主体化現象とはこうした認知能力が客体化されることで顕在化し、

<sup>11</sup> この能力の間に階層関係があるかどうかということ是不明である。この点に関しては今後の課題としたい。



言語表現の意味を担う現象であると結論づけることができる。

#### 4.3 カテゴリー化と主体化現象

4.2節では主体化現象が3つの基本的認知能力によって動機づけられていることを明らかにしたが、この節では最後に主体化とカテゴリー化の関係について考察してみたい。結論的にはこのことは「抽象化能力」というものがカテゴリー化と主体化の両方に関与していると考えてよいように思われる。というのはこの能力は個別的、具体的な事例や経験を抽象化し、一般化するものであるからである。この能力の現れはカテゴリー化では4.1節で見たようにプロトタイプからスキーマを抽出する際に関わっており、主体化現象では、4.2節で見たように客体的関係が希薄化し認知主体の認知能力が顕在化していく際に関わっている。そこで、この節ではこの2つの現象—カテゴリー化と主体化—の関係を次のように規定することとしたい。

- (38) **カテゴリー化におけるプロトタイプとスキーマの関係**：カテゴリー化においてプロトタイプからスキーマを抽出する抽象化は主体化現象に他ならない。

このように規定することの妥当性は、Langacker(2008)が文法的概念のプロトタイプとスキーマに関して次のように主張していることから支持が得られる。

- (39) It is suggested that certain fundamental and universal grammatical notions can be characterized semantically in terms of both a prototype and a schema. Providing the prototypical meaning is an objectively construed conceptual archetype. The schematic meaning resides in a domain-independent cognitive ability, initially manifested in the archetype and later extended to other domains of experience. Clearly this relation between the prototype and the schema is nothing

other than subjectification: mental operations immanent in the archetypal conception come to be used in abstraction from its content and applied to other circumstances.

(Langacker 2008: 539)

というのは(39)に述べられているように、文法的な概念はプロトタイプとスキーマの両面から特徴付けできるわけであるが、ある概念のプロトタイプとはその概念が客体的に捉えられた概念的鋳型(conceptual archetype)であり、スキーマとはその概念的鋳型が抽象化され、他の経験領域に拡張することでその特定の認知領域とは独立的に存在するに至った抽象的な概念である。これはつまり、概念的鋳型に関与している認知プロセスの顕在化であり、従って、このプロトタイプとスキーマの関係は主体化に他ならないというわけである。このことに関して Langacker (ibid.) は具体的な事例として「所有関係」、「主語と目的語」、「動作主と被動作主」、「動詞と名詞」の概念を体系化しているので、ここで簡単にまとめておく。そこで、まず「所有」という概念について言えば、そのスキーマは参照点能力を反映する心的接触という概念操作を伴っており、これは所有関係、親類関係、全体と部分の関係といった所有のプロトタイプとなる概念的鋳型の中に内在的に備っているわけであり、そのスキーマはプロトタイプの詳細な部分が捨象され、その概念操作のみが残った(つまり、前景化した)ものである考えることができるのである、次に主語と目的語の関係のスキーマについて考えてみると、そこには所有のプロトタイプとしての概念的鋳型と同様に参照点能力がやはり反映されている。というのは主語は事態の中で最も際立った実体(トラジェクター)として認識され、その事態の最初の参照点として機能しており、それに対して目的語は二番目に際立った実体(ランドマーク)として認識され、それが更に事態の中の他の実体の参照点として機能するわけであるから、この参照点連鎖の関係が動詞のプロトタイプとなる動作主と被動作主の間の関係にも反映されているということになるのである。つまり我々が実際に事態を認識する際には連続的にスキャンニングするわけで、動詞

のスキーマはそのような個別的な事態の把握から客体的内容を捨象し、時間の流れに沿って連続的にスキニングされる関係概念のみを表すのである。最後に「名詞」ついてであるが、名詞のスキーマはグループ化(grouping)や具現化(reification)という概念操作を伴っており、こうした概念操作は名詞のプロトタイプである物体という概念的鋳型の中に内在的に備っているものであり、名詞のプロトタイプを抽象化し、こうした概念操作を顕在化したものが名詞のスキーマであるということである。<sup>12</sup>

このように Langacker は文法概念のプロトタイプとスキーマの関係は主体化現象そのものであることを主張しているわけであるが、本稿ではそれを更に押し進め(38)に示されるように文法的概念以外のカテゴリー全般に渡ってプロトタイプからスキーマを抽出する過程が主体化現象そのものであることを主張したい。

そこでまず次の動詞の rise を例に考えてみる。

- (40) a. The balloon **rose** quite slowly. [objective, "factive" motion]  
 b. The trail **rises** steeply near the summit. [subjective, "fictive" motion]

(Langacker 2006: 25)

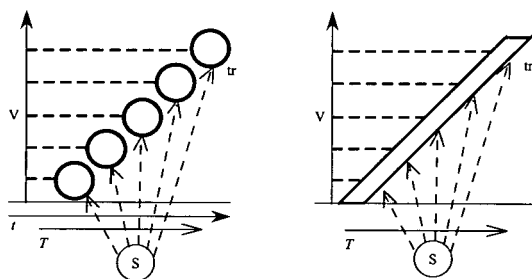


Figure 23

(ibid.)

<sup>12</sup> Langacker(2008:104-108)によれば、名詞のプロトタイプとは「モノ(thing)」であり、そこにはグルーピング(grouping)と具現化(reification)という認知操作が関与している。具体的言えばグルーピングとはモノ同士を近接性(contiguity)や類似性(similarity)に基づきまとめあげグループ化する操作のことであり、具現化とはグループ化されたものをひとつのまとまりとして操作することである。例えば、名詞 committee とは一人一人の人がグ

(40a)の rise は図23の左図に対応するが、これは実際の移動(factive motion)を表しており、概念化者は時間の流れ(t)に沿ってオン・ステージ上の主語であるトラジェクター(tr)が垂直方向(V)に上がっていく様子を客体的にスキャンニングしている様子を描いたものである。(その認知処理の時間は(T)で示されている。)一方(40b)の rise は右図に対応し、この場合はオン・ステージ上のトラジェクターが時間の流れに沿って実際に移動しているわけではない(従って、図では時間の流れを表す(t)は示されてはいない)。(40b)はむしろ概念化者がオフ・ステージからトラジェクターの静的な位置関係を、処理時間にそってスキャンニングしているのである。言い換えれば、客体的なトラジェクターの移動が希薄化し認知主体の主体的なスキャンニングという認知プロセスが顕在化しているわけで、仮想上の移動(fictive motion)(もしくは主体的移動(subjective motion))である。従ってこの実際の移動から仮想上の移動へのプロセスは主体化現象であると言えるわけである。

そしてこのことをカテゴリー化の観点から捉え直し、主体化が大雑把に言って客体的関係から主体的関係への移行のプロセスであることを考え合わせると、rise の実際の移動の用法の方がプロトタイプ的意味であると言えるわけである。つまり、rise のプロトタイプとは「トラジェクターが自ら垂直上方向へ移動する」事態として捉えることができ、オフ・ステージにいる認知主体がその事態を視線で追う、すなわちスキャンニングという認知プロセスを伴うわけである。そして、このプロトタイプからの拡張例として主体化の後の仮想上の移動の用法を考えることができるわけであるが、この用法では上で見たように、トラジェクターの客体的移動はなく、オフ・ステージ上の認知主体の垂直上方向への視線の移動、つまりスキャンニングが'rise'の意味を担っているのである。つまりこの2つの用法を1節で述べた「2つのモノや事態を比較する」という人間の基本的な認知能力を顕在化し、(37)の1.の抽象化能力によって共通する意味

---

ループ化され、ひとつのグループとして働くよう具現化されたものである。またこれらの操作は動詞から名詞化を考える際にも関わる。例えば、動詞 choose にはトラジェクターがランドマークを選択するという局面が関与するが、名詞 choice(選択)ではこうしたひとつひとつの局面がグループ化され、ひとつのまとまりとして具現化されたものである。

を抽出することで「認知主体の垂直上方向へのスキャニング」というスキーマの意味が得られるのである。従って、このように考えるとプロトタイプからスキーマを抽出するプロセスはまさしく抽象化を伴う主体化現象とも言えるわけであり、換言すればカテゴリー化には認知主体の認知能力とその現れとしての認知操作・認知プロセスが必然的に伴っているわけである。

このように主体化が概念化者の認知操作が顕在化しそれが意味を担う現象であるとする、このことは当然、文法的な概念ばかりでなく、カテゴリー全般のプロトタイプとスキーマの関係にも当てはまるのである。というのは主体化とは(41)に述べられているように人間の直接的な経験と本質的に結びついた心的操作(mental operations)がその直接経験とは独立的に存在する事態の解釈にも適応されていく現象であり、その過程には直接経験の抽象化という認知プロセスが当然含まれているからである。そしてこのことと、(42)で述べられているように抽象化によって形成されたスキーマがカテゴリー化の機能をもつことを考え合わせてみると、プロトタイプとスキーマの関係はまさに主体化現象として捉えられるわけである。具体的に言えば、「鳥」を例に挙げると、我々は日常の直接的な知覚経験から、瞬時に想起できる、身近に親しんでいる等の心理的な処理過程を経て、「鳥」のプロトタイプを形成する。スキーマとはそれを抽象化したものであるが、このスキーマとしての「鳥」の意味を担っているのはまさに我々の抽象化という認知操作であり、スキーマ形成は主体化に外ならないわけである。

- (41) In a final means of transcending direct experiences, mental operations inherent in a certain kind of experience are applied to situations with respect to which their occurrence is extrinsic. This is called **subjectification**, indicating that the operations come to be independent of the objective circumstances where they initially occur and whose apprehension they partially constitute.

(Langacker 2008: 528)

- (42) Schematization is fundamental to cognition, constantly occurring in every realm of experience. The extraction of a schema is simply the reinforcing of something inherent in multiple experiences, at whatever level of granularity their commonality emerges. A schema should therefore be seen as **immanent** in its varied instantiations, not as separate and distinct (even if shown individually for analytical purposes). By its very nature, a schema serves as a **categorizing** function: capturing what is common to certain previous experiences, it can be applied to any new experience exhibiting the same configuration. [...] Finally, as representations of conventional patterns, schemas provide the base of for assessing linguistic well-formedness. An expression is judged well-formed to the extent that it bears relationships of elaboration (rather than extension) to the schema involved to categorize it.

(Langacker 2008: 56-57)

確かに、この「鳥」のプロトタイプと「鳥」のスキーマの場合には先に見た 'across' や 'be going to' の主体化が概念化者の認知操作のみが顕在化しているのとは異なり、「鳥」のスキーマの場合には、「鳥」を「鳥」たらしめる骨格的概念的意味に含まれている。しかし、ここで2節で述べた Langacker の「元々客体的に解釈されていた実体が主体的に解釈される」ことによっておこる意味拡張という主体化の定義や図7での X' で示される概念化者の実体との関わりということを考え合わせると、名詞のプロトタイプとスキーマの関係もやはり主体化として考えることができるわけである。

そこでこのことを更に具体的に1節でみた [ネコ] のカテゴリーを例に考えてみると、我々が [ネコ] という場合には、これまでのネコの知覚経験を通じて (少なくとも大人の場合は) プロトタイプ的なネコというものを築き上げていくはずである。たとえば、ネコのプロトタイプが [三毛猫] だとすると、毛

色に言及すれば白・黒・茶の3色の毛がまじっているものと定義されるだろうが、もちろん、ネコによっては毛色が3色とは限らない。ネコのスキーマを抽出する場合、当然こうした毛色は捨象してしまう情報である。つまり、他のより認知的に際立つ部分(例えば、形状、鳴き声など)に注目し、抽象化するわけである。先に述べたようにプロタイプとスキーマに基づくカテゴリー化が主体化現象そのものであるとすると、個別のネコに特有の客体的部分(例えば、毛色など)が希薄化し、スキーマを抽出するわけであるが、ここにはどのような認知プロセスが顕在化しているかと言えば、それは「抽象化」という認知プロセスであると言える。視覚作用が概念作用と平行することは第1節で見たが、我々は具体的なネコを知覚する場合、そのネコを知覚情報として見てはいるが、後になってその細部まで記憶しているかどうかは不明である。例えば、ヒゲが何本あったかや爪の長さ等は視野にあり視覚として見ていた情報のはずであるが、そこには認知主体の意識が向けられていない。つまり認知的に際立っていないため記憶にとどめていないわけである。これと同様にプロトタイプである三毛猫からネコのスキーマを抽出する過程では、客体的な詳細情報が希薄化され抽象化という認知プロセスが顕在化し、[ネコ]という抽象的なスキーマが抽出されるわけである。<sup>13</sup>

以上のように、カテゴリー化の関係においてプロトタイプは客体的に把握されるのに対して、スキーマは客体部分が希薄化し認知主体の認知プロセスが顕在化したもの考えると(38)に挙げた規定は妥当なものと結論づけることができる。カテゴリー化は人間不在のプロセスではなく、むしろ認知主体の認知能力とその現れとしての認知操作・認知プロセスの積極的な関与があるのであり、我々人間は柔軟で動的なカテゴリー形成を成し遂げていると言えるわけである。

<sup>13</sup> もちろん動詞(rise)の例と同様に、名詞(ネコ)の形状などを知覚するためにはスキューニング、特にそれぞれの局面を脳内に段々と蓄積していく累積的走査(summary scanning)という認知操作が関わっているわけであるが、主体化によりもちろんこの認知操作も顕在化すると考えられる。つまり、ネコの例で考えるとこの認知操作によってネコをスキューマ化する際には詳細部分が捨象されたネコの形状等のイメージが残るわけである。従って動詞のプロトタイプからスキューマを取り出す際のみならず主体化によってスキューニングが顕在化するわけではなく、名詞の場合にもその背後でスキューニングという操作が関与しているわけである。

## 5. まとめ

小稿では Langacker の「主観性」「主体化」という現象を Traugott のいう「主観性」との違いから検討し、Langacker の「主体化」とはあくまで人間が持っている基本的な認知能力の顕在化である点で、Traugott の「主観性」とは異なっていることを述べた。このことは Langacker に言語観が「知覚作用」と「認知操作」の並行性をその基本としていることから明らかであり、この点で「主体化」という現象がカテゴリー全般のプロトタイプとスキーマの関係にも関わっていることを主張した。

## 参考文献

- 深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』東京：研究社。
- Hayase, Naoko 1997. "The Role of Figure, Ground, and Coercion in Aspectual Interpretation." in Marjolin Verspoor, Kee-Dong Lee and Eve Sweetser (eds.). *Lexical and Syntactic Construction and the Construction of Meaning*, 33-51. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald. W. 1985. "Observations and Speculations on Subjectivity." In: John Haiman (ed.). *Iconicity in Syntax*. 109-150. (Typological Studies in language 6.) John Benjamins, Amsterdam.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. vol.2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald. W. 1995. "Viewing in Cognition and Grammar." In: Philip W. Davis (ed.). *Alternative Linguistics: Descriptive and Theoretical Modes*. 153-212. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald. W. 1998. "On Subjectification and Grammaticalization." In: Jean-



Langacker の主観性(Subjectivity)と主体化(Subjectification) (濱田英人・對馬康博)

- Pierre Koenig (ed.) *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. W. 2006. "Subjectification, grammaticalization, and conceptual archetype." In: *Subjectification Various Paths to Subjectivity*. (Cognitive Linguistics Research 31.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 中村芳久 編 2004. 『認知文法論Ⅱ』大修館書店.
- 中村芳久 2009. 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』353-393. 開拓社.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1988. "Pragmatic strengthening and grammaticalization." *BLS* 14. 406-416.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. "On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change." *Language* 65. 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. "Subjectification in grammaticalisation." In: Dieter Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*. 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König. 1991. "The Semantics-Pragmatics of Grammaticalization Revised." In: Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*. Vol.1. 190-218. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山梨正明 2004. 『ことばの認知空間』東京：開拓社.